



©Felix Broede / DG

すべてを持つプリマの魅力が花ひらく夏の夜

# モイツァ・エルトマン リサイタルへの期待

文・加藤浩子(音楽評論家)

「今の歌手は、すべてを持っていないければだめなんです」  
数年前、ある歌劇場に取材に訪れた時に広報の担当者から聞き、思わずうなずいてしまった言葉である。歌唱力、容姿、演技力、カリスマ性・・・星の数ほどいるオペラ歌手たちのなかで頭角をあらわすには、すべてが必要なのだ。

ドイツのソプラノ、モイツァ・エルトマンは、疑いなくすべてを持ち合わせたオペラ・スターのひとりである。みずみずしい透明感にあふれ、リリカルで、よく通る芯の強さを併せ持った美声、声を映し出すように表情豊かな大きな瞳、すらりとしなやかな肢体、登場人物になりきる集中力と感性、そして舞台の上でのカリスマ性・・・もちろん厳しい努力の賜物でもあるのだろうけれど(聞くところによるとベジタリアンで、食事にもとても気を使っているそう)、天は何物も与えたと呟きたくなる。

筆者が初めてエルトマンの舞台に接したのは、2010年にアン・デア・ウィーン劇場で上演された《魔弾の射手》のエンヒェンだったが、声、演技双方の、「打てば響く」ような存在感に圧倒された。彼女が登場すると、光が差し込んだように舞台がぱあつと

明るくなるのだ。以来エルトマンはもっとも気になる歌手のひとりとなって、現在に至っている。

「何物も与えられた」エルトマンだが、他の歌手にはなかなか見られない彼女の美点は、卓越した知性と冒険心だ。バロックから現代ものまで幅広いレパートリーを持ち、多くの歌手が尻込みする現代オペラの難役にも挑戦する。エルトマンは、膨大なせりふを我が物にする知性と超絶の歌唱力、妖艶であると同時にシニカルな演技が要求される難役中の難役であるベルクの《ルル》のタイトルロールを完璧にこなせる数少ないソプラノのひとりであり、ザルツブルク音楽祭のような大舞台で新作オペラの初演を任されるほど、現代の作曲家たちに支持されている稀な歌手なのだ。

今回の紀尾井ホールでのリサイタルは、世界を魅了するエルトマンの真髓を間近で体験できる、またとないチャンスである。流麗で清らかな旋律美がほとばしるメンデルスゾーンの歌曲は、透明度の高い彼女の声にびつたりのレパートリー。メンデルスゾーンならではの歌心にあふれたピアノ・パートとの掛け合いは、夢見心地にさせてくれるはずだ。

プログラム後半のモーツァルトは、エルトマンがもっとも大切に、またその演唱で評価されている作曲家。「一生関わり続けたい」とインタビューで語っている。そんな彼女が歌うモーツァルトは、美しいだけでなく細やかなニュアンスと説得力に富み、聴き手の心を震わせるのだ。彼女の初ディスクも、モーツァルトの名曲を収めた「モーツァルト・ガーデン」である。

世界のスター、エルトマンが降臨する夏の一夜。その時紀尾井ホールは、エルトマンの清冽な声が花開き香り立つ「庭(ガーデン)」となることだろう。

## メンデルスゾーン

- 新しい恋 Op.19a-4
- 二人の心が離れてしまえば Op.99-5
- ズライカ Op.34-4
- 恋する女が書いていること Op.86-3
- 葦の歌 Op.71-4
- 月 Op.86-5
- ズライカ Op.57-3
- 歌の翼に Op.34-2
- 初めてのすみれ Op.19a-2
- 挨拶 Op.19a-5
- 花束 Op.47-5
- 春の歌 Op.47-3

## モーツァルト

- 満足 KV349
- すみれ KV476
- 寂しい森の中で KV308
- 魔法使い KV472
- ルイーゼが不実な恋人の  
手紙を焼いたとき KV520
- 静けさはほほえみつつ KV152
- 歓喜に寄す KV53
- 春へのあこがれ KV596
- ラウラに寄せる夕べの想い KV523
- コンサートアリア  
さらば我が麗しの恋人～とどまれ、いとしき人よ KV528

2018. 7. 3 (火) 19:00 開演  紀尾井ホール

料金(税込) S 8,000円 A 4,000円 ベアS 15,000円  
友の会ベアS 14,000円 学生A 2,000円

チケット 紀尾井ホールウェブチケット <http://www.kioi-hall.or.jp>  
取扱い 紀尾井ホールチケットセンター ☎ 03-3237-0061 (10~18時/日・祝休)